ハイウェイスター

DJヨシユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイウェイスター

【Ｎコード】
Ｎ１６３４Ｏ

【作者名】
ＤＪヨシユキ

【あらすじ】
プロカメラマンを目指してカメラ助手とフリーターに日々励んでいるジュン（山岸潤）には辛い過去があった。それは中学時代に同級生の女の子を犯して妊娠させてしまったこと。その事件が彼の思春期に濃い陰を落とし、ジュンの恋愛観は中学生のままだった。
ある日ジュンの前に大手芸能事務所のマネージャー、石井と中島が現れる。彼らには新興芸能プロを設立するという野望があった。この日を境にジュンの人生は激しい転換期を向かえる。黒い眼鏡の

大谷社長を中心に、専務の石井、マネージャーの中島、デスクの持田みどり、カメラマン兼マネージャーとしてジュンを加えたインタープロがスタートする。

初めのうちこそ女性に対する不信感などから戸惑っていたが、徐々に街頭スカウトにも慣れてきたジュン。女子高生たちの夏休み最後の日、ついにアイドルアヤミ（西野綾美）と運命的な出逢いをする。そして僅か1週間後、ジュンの運命をつかさどるもうひとりの女性、村山裕子に出逢うのだった。やがてふたりの女性はジュンの心の中に深く入り込んでくる。偶然一緒にミュージカルを見にいったことで裕子に惹かれていくジュン。止めようのない恋情にジュンの異性観は変貌し始める。そんなある日、綾美から集団レイプの告白をされる。突然蘇ってきた中学時代の赤裸々なレイプ映像に苦しむジュン。そして追い討ちをかけるようにインタープロに売春疑惑が浮かび上がる。気が動転するあまり、ジュンは持田みどりの心を深く傷つけてしまう……。

そんな折、ようやくインタープロにも希望の兆しが見えてきた。綾美がスーパーアイドルユニット『Ａα四人娘』のメインボーカルに大抜擢されたのだ。そして思いもしなかった映画製作が決まる。一気にジュンの周辺は慌ただしく動き出した。ところが皮肉にも絶望へのシナリオが用意されていたジュンの運命。最愛の裕子はオランダに旅立ってしまう。暗礁に乗り上げた映画製作。アイドルアヤミとの別離。ジュンの波乱に富んだ青春はつづく……。

第一章　カフェイタリアーノ　第一話

第一話

世紀末の6月である。
数年後に完成する巨大な都市開発プロジェクトの長いフェンスを越えた先を広尾方向に曲がる。2本目の路地を左に入り、細い緩やかな坂道をしばらく登ると、家庭的なイタリア料理でもてなしてくれると評判の小さなレストランがあった。

空に浮かんだ月がうっすら見えてくるこの時刻になると、カフェイタリアーノのネオンはマゼンタピンク色に光を放電する。ちょうどそのタイミングを見計うように現われたふたり連れの男たちが、イタリアンレッドの扉を押し開けた。
俺がカフェイタリアーノでバイトをするようになってちょうど1ヶ月になる。イタリア料理といえば、せいぜい宅配ピザと数種類のパスタだけの知識しかなかった俺を、髭オヤジじゃなくてマスターは快く雇ってくれた。俺がフリーのカメラマン助手をやっていると聞いて興味を持ったらしい。「芸能界のお客さんもよく来るんだよ」そう言って嬉しそうだった。

シンプルなオープンキッチンを囲んだ10人掛けのカウンター席を中心に、大人4人がゆったり座れるテーブル席が3つあるだけの小さな店だが、俺のほかにスタッフはいなかった。（半年近く雇っていないそうだ）撮影のある日は遅れて店に出たり、急に休んだりしなければならない。マスターにはいつも迷惑ばかりかけていた。しかし本業の日雇いカメラマン助手だけでは生活も苦しく、副業でバーテンダーの仕事をはじめて半年余り、クラブからショットバーまでバイト先を6件ほど変えてきた。

「あれ？石井さん！ずいぶん久しぶりだね」
口髭を上品に蓄えたマスターがニコニコしながらカウンター越しに声をかけた。
「いらっしゃいませ、こんばんわ」
カシャカシャ！カシャカシャカシャカシャカシャ！カシャ！

俺はカウンターに座った会社員風の女性客のひとりにヴェネチア物語を作っていた。ラム酒をベースにしたローズレッドのショートカクテルだ。これは数少ない俺のオリジナルだった。
「やあ、マスター！新しいひと入れたの？」
「うん。ようやく新しいスタッフを雇う余裕が出てきたからね」
突然やってきたその客は久しげにマスターと話を始めた。
「そうだ、石井さんに紹介するよ。彼は山岸潤くん。えーと２２才だったね？ぼくはジュンって呼んでいるんだ」
「山岸です。よろしくお願いします」
「ぼくは石井です、よろしくね。近頃忙しくてなかなか来てなかったけれど、マスターにはいつもご馳走になっています」
「オッス！中島です」
「ジュン。芸能事務所のモリプロを知っているかい？彼らはそこのマネージャーなんだよ。さっそく写真の仕事を貰えるように売り込まないと」
マスターは嬉しそうにそう呟いた。
え！モリプロって？芸能界の？俺は意外に思った。一見、石井という男はインポートブランドのスーツを着こなして、ゴールド系のアクセサリーが似合う高級クラブのホストのようだ。やや背が低いハンディを除けば、その端正な甘いマスクとスマートな躯のこなしは芸能マネージャーの領域を遥かに越えている。一方、連れの中島は無口で野性的なギラギラした目つきが印象に残る男だ。どことなく裏社会で生きる一匹狼のようなデンジャラスな香りがした。
「石井さん。こう見えてもジュンはフリーカメラマンのアシスタン

トをやっていてね。何かあったらよろしく頼みますよ」
マスターは俺の両肩に手を掛けて自慢気に言ってみせた。
あのー正直者の髭オヤジ殿。お願いだから天下のモリプロマネージャーたちの前で俺の素性をばらさないで下さい。　第一印象が駆け出しのアシスタントじゃカッコつかないよー。
「きみはカメラ助手なのか。自分でも写真を撮ったりするの」
石井は優しい声で訊いてきた。
「あっ、はい。まだまだ未熟ですけど」

俺はひどく緊張していた。頭が真っ白になって言葉に詰まってしまう。もちろん自分を売り込む余裕なんてあるはずがない。
「よかったら、こんどきみの撮った写真を見せてくれないかな」
冷や冷やものだ。俺は無言でこくり頷いた。
「どんな写真でもいいから」
石井はそう言って俺に微笑みかけると中島を連れて一番奥のテーブル席に座った。
「マスター！昼飯食べ損なったから、お任せで何かボリュームのある奴ください！」
「オッケイ！」
素早く冷蔵庫を開けるなり、仕込んでおいたカツレツ用の小羊肉を取り出して、イタリア風ソテーの準備をはじめるマスター。リズミカルな手さばきはいつ見ても感心する。
「ジュン。細麺のスパゲッティを２００グラム茹でてくれるかい」
「はい。まかせて下さい」
自分で言うのも何だが、ロングパスタをアルデンテに茹で上げるテクニックだけはプロ級の自信があった。まだぎこちなく映る動きさえもう少し様になれば、立派なイタリアンシェフに見えるはず？
「良かったじゃないか、ジュン。ちょうど石井さんを紹介しようと思っていたのさ。あの業界は何が起るか分からないからな。チャンス、チャンス！」

マスターは顔を皺くちゃにしながら独り言のように囁いた。
面倒見のいい髭オヤジ殿。ほんとうは俺も内心嬉しくてドキドキしていました。モリプロと言えばアイドル歌手からタレント、CMモデルまで多数抱える大手芸能プロダクションです。上手く付き合えば、グラビア写真やCDジャケットを撮ることだって夢じゃないと思いました。いいや、やっぱり夢でしょう。
「中島さん！麦酒でいいかい」
カツレツをソテーしていたマスターは頃合いをみて声を掛けた。
「くださーい！喉乾いちゃった」
中島は嬉しそうに手で飲む格好をしてみせた。
「ジュン。大至急だ。生麦酒を中島さんに。石井さんにはフレッシュライムを絞ったペリエを持って行ってくれないか」
俺はマスターに言われたドリンクを急いで用意して石井と中島が待つテーブルまで運んだ。スマートに奉仕しようと気取ったつもりが、足を取られてグラスを倒しそうになる。「お待たせしました、どうぞ」
「ありがとう。しかしジュンくんは背が高いんだね。どれくらいあるの？」
「はい。185ぐらいですね」
石井は目を丸くさせて俺を見上げていた。
中島は俺たちを無視して旨そうにゴクゴク生麦酒を飲みこむと、素早く煙草に火をつけて大きく煙をはいた。
「よかったらきみの先生の名前を教えてもらえないかな。案外有名なカメラマンの助手さんだったりして？ほら、アイドルの写真集を数多く撮っている野村セイシンとかさ」
石井はペリエを酸っぱそうに飲んだ。
「とんでもありません。基本的にはフリーの助手なんです。よく手伝うカメラマンの中には女性タレントばかり撮るひともいますが、そんな超メジャーなひとの助手はやったこともありません」
「へえー、ジュンくんはフリーなのか。で、どんなカメラマンにな

りたいの」

俺は面接試験を受ける大学生のような気分だった。緊張のあまり頭の中が真っ白になる。石井が青年社長で中島は怖面の専務といったところか？困ったことになった。撮りたい写真の方向性さえ曖昧な俺に、将来のビジョンなんて語れるわけがなかった。

第二話

第二話

「写真の専門学校に行きたいんだ」
「何よ！何を言いだすの！」
母はひどく慌てたように声を上げた。
「まさか、先生が奨めたのですか？」
「とんでもありません。お母さん、ぼくも初めて聞きました」
高校3年の初夏。学校の会議室で行われていた三者面談の光景だった。
突然俺は予定していた付属大学への進学をキャンセルすると宣言したのだ。母と担任教師は顔を見合わせたまま固まっている。
「写真学校に行ってどうするのよ」
「分からない」
「カメラマンになれる訳ないでしょう」
「別になりたいわけじゃない」
「じゃあどうして？」
俺が小学5年生のときに父親は事業に失敗して失踪。その後、女手ひとつで育ててくれた母の希望で俺は私大の付属高校へ進学した。（じつをいうと、俺にも男子高でなければならない事情があったのだ）いくら大学までストレートに行かせたいという願いがあったとしても、公立高よりはるかに高い入学金と授業料は相当な負担になっていたはずだ。しかし、どんなに親不孝だと分かっていても俺は譲らなかった。何を犠牲にしても写真を勉強しなければならないほどの、運命の出逢いがあったから。

俺の高校生活は人生の中でもっとも空虚な時期にあたる。記憶にある出来事といえば、入学して間もなくサッカー部の先輩から受け

た陰湿な虐めぐらいか。思春期の楽しかった想い出は全部、中学時代に置き忘れてきたのだ。いや棄ててきたというべきかもしれない。

すべてはあの事件からはじまった。あの事件がいまの俺のすべてを形成している。

それは中学2年の文化祭の夜。俺は好きだった同級生の女の子をレイプした。

「ジュン！料理上がったよ！」マスターの声がやけによく通った。

絶妙なタイミングで面接試験を中断してくれたマスター。ホッとした俺が笑顔で振り返ると、どこか淋しそうな眼差しが俺を見ていた。

第三話

第三話

撮影アシスタントの仕事が入ってないときは、いつもカメラをぶら下げて街を歩き廻るのが俺の日課だった。自慢じゃないけど、ファインダーから覗いた風景はどれも自分の世界のように映るんだ。倒れた自転車や転がったごみ箱はもちろん、古びて剥がれかかった看板だってファインアートなオブジェに早変わりする。感性のアンテナがハイポジションになると、魂が昇天して芸術の神様にもなれたし、カルティエブレッソンやダイヤンアーバスの霊魂が宿ったこともあった？

１７才の春、あの瞬間からすべての価値観が変わった。

高校からの帰宅途中、あの日はめずらしく日没前の時刻だった。俺はいつも通る工場跡地を曲がり、多摩川の河原を覗く小道に差し掛かっていた。突然照りつけた強い西日のせいで目が眩んだ瞬間、光の輪の中から少女が現れた。俺は足を止めて魅入ってしまう。

少女は自転車を止めて斜光に輝く河原を眺めていた。
まるで光に包まれた女神のようにたたずむ長身のシルエット。
光の帽子をかぶった栗色の髪と光輝く横顔が眩しい。
少女の背景では明るい緑色の粒々が輝く。

その日を境にして、俺の視界に映るあらゆる風景は魔法にかけられたように光輝いた。すでに風化したはずの工場跡地が宝物の倉庫になり、道端に忘れ去られた花々が金色の花粉を飛ばしていた。青空の色が毎日違うことも知った。空気の色も違う。風の匂いさえも。

その頃から俺はあることを意識しはじめる。『写真』つまり写真を撮るという行為だ。一瞬の輝き、偶然の出逢いを描き留めるには

この手法しかありえない。俺は写真の世界にのめり込んでいった。
住みはじめて3年になる代官山の街並は俺にとって一番のロケ場所だった。閑静な街並みの中に何気なくたたずむアンティーク店、渋谷系原宿系とは明らかに一線を引く個性豊かな洋品店、キッチュでかわいい雑貨屋、昼夜様々な景観を楽しませてくれるこだわりのレストラン、いろいろなレシピが混ざり合った魅惑的で楽しい風景が、子供のころに目を輝かせながら色を入れていった塗絵画集のように、色鮮やかなイメージ写真となって俺のポートフォリオに収まっている。

いつものように俺は愛機のコンタックスを首から下げて代官山の路地裏を歩いていた。
すぐ先のオープンカフェの店頭を大勢の人垣が囲んでいる。どうやらムービーのロケ撮影が行なわれているらしい。俺は尾行中の私立探偵顔負けの忍び足でクルーの背後に廻り込んだ。ムービーカメラマンの後方から撮影風景を覗いてみると、見覚えのある有名女優がアリフレックスの前に立っていた。昼中だというのに5灯の大型HMIライトが女優の四方を取り囲んでいる。不思議なくらいの無風状態。俺は彼女の名前を想いだしてみた。
「はい！それでは本番お願いします！」
「本番いきます！」「本番！」
一斉にライトが灯った。照らし出された女優の身体は発光体のように青白い輝きを放っている。光のレベルはますます強くなる一方で、すぐにでも臨界が起こりそうな気がした。俺はタイムスリップした女優の身体が眼前から消え去る光景を想像していた。
すると突然スイッチが入ったように、光に包まれた少女の映像がリンクした。
光の帽子を被った栗色の髪……光輝く横顔……
俺の身体は眩い発光体に吸い寄せられるように歩み出していた。
無意識のうちにカメラを身構える。ゆっくり、ゆっくり、一歩ずつ

女優との距離は近づく。２００ミリズームレンズを透過してファインダー画面いっぱいに女優のクローズアップが映し出される。俺は無我夢中でシャッターを切っていた。

カシュン！カシュン！カシュン！カシュン！カシュン！カシュン！どうしたことか、人さし指がシャターボタンに吸い付いて離れなくなる。秒間６コマのモータードライブは瞬く間に３６コマの画像を撮り終えてしまった。周囲の情景は時間の隙間に堕ちたように止まったまま、俺だけを静観している。いま俺が見たものはいったい？単なる偶然の出来事だったのか。あるいは都合のいい幻覚なのだろうか。ファインダーに映し出された女優の表情は間違いなく俺に向かって微笑んでいた、ように見えた。

「失礼しました！」そう叫ぶなり俺は全力で女優の脇を走り抜けていた。

「おい！何だ、いまのは！」誰かが大声で怒鳴った。

「ったく！撮り逃げかよ！」

「誰なんだあいつは？」

「気にするな。ただのカメラ小僧だろ」

耳にこびりついた撮影スタッフたちの苦言を振り払うように、俺は無我夢中で走りつづけた。あの女優のクローズアップショットが脳細胞にフィックスしたまま離れない。無理に振りほどこうとすると視界の大半が欠落してしまう。３次元からの逃避。俺はどこまで来たんだろう？時間の裏側に迷い込んでしまったのではないか。よく見ると見覚えのある景色の中にいた。ここは自分のアパート前だと気づく。

冷静になって自分が今とった行動を検証してみる。俺自身、禁断の写真を撮ったという罪意識はまるでなかった。むしろこれは必然だったとさえ思う。映画のロケシーンという形に変えて、記憶の淵から蘇ったあの日の光景を撮影したに過ぎないのだ。

第四話

第四話

今夜のカフェイタリアーノは早い時間から大勢の客で賑わっていた。めずらしくピーク時にはウェイティングチェアが足りなくなるほど。

俺はオーダー取りとカクテルメイクで大忙しだった。梅雨の蒸し暑い夜のせいか、シャンパンとフレッシュオレンジを1対1で割ったカクテル、ミモザがよく売れた。

マスターはピッツアを焼いたり、人気の小羊カツレツをソテーしたりと、キッチンを目まぐるしく動き廻っている。額には玉のような汗を浮かべていたが、とにかく楽しそうだ。

「マスターこんばんは！」

まるで舞台で主役を張る看板役者さながらの登場シーンだった。先に入ってきた中島がひどくもったいぶるようにイタリアンレッドの扉を開けると、寸分の隙もなく堂々とした間合いで石井は現われた。

「やあマスター！しかしイタリアーノは大盛況だね。貸し切りパーティでもやっているのかと思ったよ。ハハハハ」

石井はニヒルで涼しい目を大きく見開いては店内を見廻している。

「そうかい？でも石井さん。たまにはいいでしょう。ジュンの給料日まであと2日だし、本当はこれぐらい稼がないとギャラなんか出せやしないんだ」

マスターはいつになくジョークを飛ばすほどご機嫌である。

「石井さん、とりあえずカウンターにどうぞ」

俺はひとつだけ空いていたカウンターの隅に石井を座らせた。初対面の日から連日のようにやってくる石井だが、未だに会うと緊張してしまう。ニヒルでいて自信に溢れた力強い眼差しはどうも苦手

だ。
「そうだジュンくん。仕事のことできみとゆっくり話をしたかったんだ」
石井はカウンターから躬を乗り出して俺の顔を覗き込むように小声で言った。
「まさか、撮影の仕事なんですか？」俺は目を輝かせた。
「来月早々、新しくできる芸能事務所に参加することになってね、今はその準備で大忙しさ。ただね、あとひとり、有能なスタッフを探しているんだけれど、なかなかいい人材が見つからなくて弱っている」
「そうですか。でもすごいなあ、きっと人気タレントも大勢抱えるんでしょう」
「うん、まあね。そこでジュンくんに相談があるんだ」
「あ、はい」
「きみをうちの専属カメラマン兼マネージャーに推薦してみてはどうかと考えている。もしその気があるのなら一度社長に会ってみないかな」
「え！ちょっと待って下さい！おれはまだタレントの写真なんて撮れないですよ。それに芸能マネージャーなんて、おれにできるわけがないです」
芸能界？アイドル？カメラマン？俺は目の前にそびえ立つ巨大な壁に囲まれてしまう。
「石井さんひどいや。いきなり引き抜きは無しでしょう」
聞き耳を立てていたマスターは出来上がったばかりのパスタを皿から落としていた。
「まあまあマスター。そんなに怒らないでよ。ジュンくん、また出直して来るからよく考えておいてね。じゃあよろしく」
甘いマスクからうっすら笑みを滲ませて石井は慌ただしく出て行った。その後に続いた中島が扉のところで振り返るなり、拳を握ってガッツポーズをしてみせた。

上機嫌だったマスターからみるみる口数が減る。ポンポン飛び出していたジョークさえ喋る余裕がなくなり、工場の無菌室で黙々とコンピューター基盤を組み立てる作業ロボットのように見えてしまうマスター。

拝啓、髭オヤジ殿。レストランは笑顔も大切ですよね。早く機嫌を直してください。

結局今夜は、普段より1時間早く10時で店を閉めることになった。

「ありがとうございました。お気をつけて」

最後までいた3人組の客が帰ると、マスターは外のネオンを消しに出て行った。戻ってくるなり店内の照明をマックスにする。俺はマスターと目を合わさずにいた。

しばらくして、俺が酒類の在庫と仕入れのチェックを終えてもマスターは黙っていた。 普段と変わることなくレジを上げると、売り上げをノートパソコンに打ち込んだ。

「マスターおつかれさま。何かつくりましょうか？」俺は努めて穏やかに訊いてみた。

「ああ、きょうは変に疲れたな。どうだい、麦酒でも飲もうか」

立派な口髭を撫でたマスター。ようやく笑顔が戻ってきたようだ。

俺は冷えた瓶麦酒とチーズを持ってマスターの前に座った。恐々口髭を覗き込む。

髭オヤジ殿。店を辞める気はありませんから安心して下さい。

「おれ、今度石井さんがきた時にはっきり断りますから」

そう言い終えるよりも先に、俺は冷えた8オンスグラスに麦酒を注いだ。真綿のような白い泡からプツプツと炭酸ガスが弾け飛んだ。

俺はマスターの言葉を待ちながらさりげなく顔色を窺ってみる。

「何だい。さっきからそんなつまらないことを考えていたのか」

マスターは気難しそうな顔でグラスの麦酒を一口だけ飲んだ。

俺は無言で真綿のついた口髭を見つめた。

「とりあえずお疲れさん。ジュンも飲みなさい」

ニッコリ笑ったマスターは俺のグラスに麦酒を注いでくれた。そして顔を皺くちゃにしながら立派な口髭を撫ではじめる。
「ところでジュン。うちの店に来て2ヶ月半ぐらいは経つのかな？きみはまじめで料理の筋がいいし、客うけもいい。何よりぼくと馬が合うと思っている」
いきなり褒め言葉を並べられて恐縮してしまう。
「それはどうも、ありがとうございます」
「しかしだ。いいかい？人間には必ず幾つかのチャンスが巡って来る。ところが一度そいつを逃がすと、次はなかなかやって来ない。じつに厄介な代物なのさ。石井さんとはもう2年以上の付き合いになるが、ぼくは信頼できる人だと思うよ」
マスターは麦酒を飲み干すとグラスを置いた。
「しかし、おれは、まだマスターと」
マスターはかぶりを振って俺の話を制すると、精一杯の優しい笑顔を浮かべながら立ち上がった。
店内の照明がゆっくりフェードアウトする。静かな店内に流れだしたカンツォーネの旋律。心地よいリズムがカフェイタリアーノに木霊すると、俺の心を縛りつけていた鎖が解けていくような気がした。　すぐにマスターは冷えた麦酒を2本抱えて戻ってきた。
「ゆっくり考えればいいさ。さあ、きょうは飲もうや」
髭オヤジ殿。あなたが少しだけ小さく見えました。

第二章　インタープロ　第一話

第一話

中学2年の二学期。文化祭の後片づけが終った夜だった。2年3組の実行委員だった俺と久美子は誰もいなくなった教室にいた。当時俺たちはつき合っていたが、ふたりとも幼かったし、キスどころか手を握ったことさえなかった。もちろん乱暴するつもりなど少しもなかったはずだ。今になって考えてみても、あの夜、俺の心にはおぞましい魔物が憑いていたとしか思えない。

後ずさりする久美子。執拗に言い寄っていく俺。恐怖のあまり声を上げる久美子。俺は久美子に抱きついた。勢いそのまま机に押し倒すと、強引に唇を重ねた。

「キャー！ジュンちゃんやめて！お願い、やめて！怖い！」

久美子の叫び声で目が覚めた。忘れたころにやって来るあの日のリアルな映像。いつ見てもこの夢はタフだ。半日は立ち直れなくなる。

橙色の斜光がワンルームの狭い部屋には少し不釣り合いな大きな鏡に反射していた。光の帯が部屋全体をオーロラのように漂う。眩しい！ひどく熱い！汗ばんだ背中にシーツが引っつく。もう朝なのか？いったい何時だろう？目覚まし時計に焦点が定まるまでの10分間、俺は何度もベッドの上で寝返りを打った。

10分が経過。まだ何も考えられない。俺は2日酔いで重くなった頭蓋骨を持て余していた。

さらにもう10分が過ぎた。やっとの思いで湿ったベッドから這い出ると、つかさず俺はベッドの下へ上半身を潜り込ませて、コダックのロゴが入った黄色いクーラーバックを引っ張り出した。無造

作にそいつをひっくり返すと、半透明のケースに入った撮影済みフィルムが２０本ほど転がった。「あった！これこれ！」散らかった中からあの女優を写したフィルムを見つけ出す。漠然と突っ込んであったように見えて、じつは１本ずつ撮影日時が記入してあるのだ。すっかり安心した俺は這い出したベッドの中へ逆戻りする。

ダークなブライドレッド色に染まるバスルームに俺はいた。水を張った３０センチ四方のバットの中に浮かぶ１枚の不思議な紙。水の波紋が紙の上にいくつもの影を落としていた。陽炎な模様の中からみるみる女の顔が現われてくる。

「やっぱり思った通りだ！」俺は興奮してそう小さく叫ぶ。

女性が浮かび上がった印画紙を手に取り注意深く眺めてみる。

もはや疑う余地はないだろう。たしかにあの女優はカメラに向かって微笑んでいた。幻影と現実は合致した。写真機のファインダーという自我暗箱でのみ存在できた虚実の世界が、銀塩紙に焼き付けるという行為で忠実に再現されたのだ。常に記憶から消え去る運命と共存する超現実。そのあまりに刹那的な生涯を半永久的にフィックスした瞬間でもあった。

俺はトリミングやコントラストの階調を微妙に変えながら、およそ３０枚をプリントした。じわじわと胸の奥から、今まで経験したことのない快感が込み上げてくる。繰り返し押し寄せる津波のような絶頂に身体の震えが止まらない。俺の心は躍り、沸き立つ血流はおさえることができずに、全身の毛穴からしぶきを上げた。

第二話

第二話

石井と六本木で待ち合わせた俺はタクシーの中にいた。これから俺たちは渋谷区桜丘町にあるという石井の新オフィスへ向かうところだった。

はじめのうちは他人事のように思えていた芸能事務所入りの夢話が、日ごとに現実味を帯びていた。それでも俺の不安な気持ちは増幅を止めない。そんな時、石井にポートフォリオを見せる機会をもった。ブックを閉じるなり手放しに絶賛する石井。輝く瞳で俺を見つめながら、こんな台詞を言い出したのだ。

「この写真ならプロでも通用するよ。きみに足りないのは経験だけだ。カメラマンとしてのキャリアはぼくが用意しよう。近い将来、アイドルたちはきみにひれ伏すことになる」

この芝居がかった口説き術は想像以上に俺の心を掴んでいた。付き添ったマスターでさえついつい乗せられてしまうほど。

ＪＲ渋谷駅南口から国道２４６号線を横断して４、５分歩くと、桜丘町というエリアに入る。アパレル関係はもちろんの事、この辺りにはグラフィックデザインナーやカメラマンの事務所も数多く点在する。俺のアパートがある代官山からも程近いので、よく歩く街でもあった。おまけにこのストリートは俺にとっても大のお気に入り。ところが、この通り沿いではほとんど記憶に無かった１２階建雑居ビルの前でタクシーは止まった。

雑居ビルの１階部分にはお洒落な白い飾り扉があるガラス張りの事務所が入っていた。

「ジュンくん。ここがうちの事務所だよ」

白い飾り扉を開けた石井はすぐに照明のスイッチを入れた。きれいにレイアウトされた部屋全体がキラキラ光って見えた。

「へえー。ずいぶん立派な事務所なんですね」
俺はすっかり感心してしまった。新しくはじめる事務所だと聞いていたせいか、ワンルームの小さな部屋を想像していたからなおさらだ。俺の部屋が軽く４つは入りそうなスペースに充分すぎる間隔をおいて５つの黒い事務机が並んでいた。すべての机上には真新しいパールホワイト色のデスクトップパソコンと液晶モニター。完璧だ。
足早に事務所内を突っ切るように進む石井に遅れまいと、大股で部屋の突当りまでやってきた俺はまたもや声を失った。事務所の右奥にある壁と全く同じに見える淡黄色の隠し扉を開けると、そこにはまるで大奥をむすぶ秘密の抜け道のような廊下がつづいていたのだ。
俺は胸に抱えたプレゼンテーションケースを盾にしながら、おそるおそる石井のすぐ後ろを歩いていく。廊下の左側には３つの扉が並んでいた。すると、いちばん奥の扉前で立ち止まった石井は、扉の音色を確認するように注意深く耳をすませながら軽く２度ノックをした。
「どうぞ！」
穏やかで落ち着いた様子ではあるが、やけにはっきりした重低音の声が返ってきた。見えない恐怖が俺を襲う。アイマスクで目隠しされた人質にでもなったような気がした。俺は石井の背中に貼り付いて隠れるように大奥へ入っていく。
「さあジュンくん。社長がお待ちかねだ」
石井はそう言うなり俺のアイマスクを剥取った。
いきなり暗闇から開放されても、景色に焦点が合うまでには若干の時差があるものだ。ここの雰囲気に慣らすつもりでゆっくり部屋を見廻してみる。すぐに俺は絶句してぶっ飛んだ。どうやら俺たちは何かの拍子に江戸時代へ瞬間移動してしまったらしい。俺の身体は桂離宮の御殿にある一室に浮かんでいた。

純和風の広々とした和室。床の間には江戸時代の水墨画が描かれた大きな掛け軸。古伊万里の花器に咲く満開の牡丹。千利休が愛用した茶器。頭上に視線を移せば、畳一畳はある大きな日本画が黄金飾りを施された額縁に収まっていた。いいや、これで締めくくるには早すぎる。障子越しに広がる絶景。それはまさしく日本庭園だった。池泉、景石、灯籠、猪おどし、竹垣、松の木、隅々まで計算し尽くされた見事な景観は腕のいい庭師の成せる技に違いない。

驚嘆などとうに遣り超して恐怖すら覚える俺だったが、この純和風の部屋が持つ深い静けさの中に漂う強烈な気の存在だけは感じ取っていた。部屋のほぼ中央にある臙脂色の暈し模様をした大きな座卓。眩い光沢面に映り込んだ日本庭園の景色。強烈な気は座卓の真ん中に座るひとりの男から発せられているに違いなかった。まるでマフィアのボス。絶えず強烈な威圧感を全身から漲らせている男が黒い眼鏡の奥からじっと俺を見ている。

「よう来たな。まあ座れや」

マフィアのボスは威圧感を包み隠すような優しい声で喋った。

すっかり委縮していた俺は石井に促されるままに座卓の前に座り、その男と向かい合う。今さら逃げ出すわけにはいかない。俺は覚悟を決めた。

「わがインタープロは労働大臣の許可に基づいた芸能プロダクションだ。タレントの発掘からプロモーション。イベントやテレビ番組のキャスティング。やがて映画製作までを一手に引き受ける会社だ。ところでお前は芸能界をどれだけ知っている？素人にこの仕事はむかんからな。ひとつだけ教えてやろう。いいか、浮き沈みの激しいこの世界で生き残るには、まず金がいる。そして権力だ。このふたつを兼ね揃えた者だけが芸能界を動かす」

「はい……」

俺が座るやいなやマフィアのボスはせっかちに止めどもなく業界の話をはじめた。俺は力なく合いの手を入れるだけで精一杯だ。

「それでお前さんは何ができる？そうか、女の写真が撮れるそうだ

な。今までにどんな女を撮った？さっそく見せてみろ」
「いや……はい」
「はっりしない奴だな。写真が撮れないなら話をする必要はない。すぐに帰れ！いいか、インタープロはプロ集団だ。わかったら、お前の写真を見せてみろ」
　それは俺の意識の中まで土足で踏み込んで来るような強引な口上だった。会話の随所にみられる攻撃的な言葉にも圧倒される。俺には到底太刀打ちできそうもなかった。
「まあ社長。彼はまだ芸能界をよく知りません。それに相当緊張しているみたいですから、あらためてぼくから紹介をさせて下さい」
　石井は失笑を浮べていた。俺と目線を合わせると微笑んだ。
「ジュンくん。このひとが我々インタープロの代表で、大谷さんだ。社長、彼がえーと山岸ジュンくん。カメラマンです」
　大谷社長は威圧感に満ちた表情をくずして苦笑していた。
「山岸潤です。よろしくお願いします」
　そう言ってぺこり頭を下げたあとで、俺は大きく深呼吸をした。この部屋の空気が大脳の隅々まで行き渡ると、霞んでいた意識が驚くほど鮮明になり、不思議と勇気が湧いてきた。
「社長さん。最近撮った写真を持って来ましたので、ぜひ見て下さい」
　片時も放さず抱えていたプレゼンテーションケースの中から、俺はＢ４サイズの黒い台紙に貼り付けた２０枚のオリジナルプリントを取り出して渡した。

　大谷社長は黒い眼鏡の中から１枚１枚に素早く目を通した。
　マフィアのボスが期待するような女性写真は皆無に等しいはずだ。あの女優の写真を除いては。
　不安が募るばかりで胸がひくつくようだ。いよいよ最後の写真、あの女優を撮った写真が現われる瞬間だ。すると終始一定のリズムで回覧していた大谷社長の手が止まる。その写真を取り上げた大谷

社長は、日本庭園から差込む柔らかい光に照らして食い入るようにじっと眺めた。
「山岸くんだったな？この写真はしばらく借りるぞ」
大谷社長は写真に目を落としたまま、俺にそう告げた。威圧感の象徴のような黒い眼鏡には、あの女優のポートレートが映っていた。
「石井。もういいだろう。今週中に結論を出すから、きょうはこれで帰ってもらえ」
「はい、分かりました」
そう言うなり大谷社長は瞼を伏せたまま動かなくなった。

一足先に事務所スペースへ戻ってきた俺は、真っ先に全身に覆いかぶさっていた緊張感の殻を脱ぎ捨てた。放心したようにどかっと椅子に腰掛けて思い巡らす。たった今遭遇したばかりの異空間は本当に実在したのだろうか？そしてあの大奥の大将軍、黒い眼鏡の大谷社長とはいったい何者なんだろう？
「ジュンくん、疲れただろう？相当緊張してたんじゃないのか」
大奥から戻ってきた石井は、くるりと向き直って事務机の端に腰掛けると俺に微笑んだ。
「はい。大谷さんの存在感にはすっかり圧倒されました」
「ハハハハ。無理もない。ぼくだってまだビビることがあるよ」
石井にそう言われて内心ほっとした。
「石井さん。大谷さんはずっと芸能界でやってきた人なのですか？」
「そうだな、聞いたところではある政治結社の活動が主な仕事だそうだ。政治的な力は相当あるみたいだな。政党によっては幹事長クラスと並ぶくらいの発言力もあるらしい」
石井は腕を組んで気むずかしい顔をした。
「本当はすごい人なんですね」
これ以上聞き出すことに憶して、俺は素直に納得したような言い方をした。

「多分ね。そうは聞いていても、本当の素性は謎に包まれている。そもそも、ぼくの義理の兄の先輩でね。早稲田だったかな」
「そうですか。でもおれの人生には絶対無縁な人種ですよ」
そう言いながら自分が引きつった笑いを浮かべていることに気づいた。
「どの芸能事務所にもバックに大物権力者がいるものさ。そう言えばきみのアパートはこの近くだったね？徒歩圏内とは羨ましいな」
「ええ、でも石井さん。おれの写真は気に入って貰えたんでしょうか？期待外れだったなんてことないですよね」
「あの様子なら心配はいらない。きっと合格点をもらえるよ」
石井はすくっと立ち上がると、背後から俺の肩を揉んで激励してくれた。
最初の路地を右に３００Ｍ。次の路地を左へ１００Ｍ。最後に郵便局角を右に曲がり、一直線的に伸びたストリートを２００Ｍ。はやる気持ちを抑えきれない俺は、アパートから事務所までの道のりを何度も頭の中で描いてみた。

第三話

パンパン！サッサ！パンパン！サッ！パンパン！サッサ！パン！

原宿の竹下通りにとん太という串焼き屋がある。東郷神社の入り口角にあるクレープ屋さんを過ぎればあと少し、パンク系ショップの並びにある破れかけた大きな赤提灯が目印だ。とん太という屋号は先代のオーナーが焼き豚専門店としてはじめたときの名残らしい。今では地鶏肉を主体に備長炭で焼く塩焼き中心のヘルシーさが売り物になっている。この店には俺がレンタルスタジオで修業していたころの仲間で修という男が働いていた。

いつものようにすし詰め状態のカウンターは、若い女性客の楽しそうな笑い声で賑わっていた。やたらと女子大生風のグループが多い今夜のとん太で、すっかりお決まりの定位置になった入口よりのカウンター隅っこに座った俺は、手羽を噛りながら麦酒を飲んでいるところだった。

「しかしお前が芸能カメラマンかよ！笑わせてくれるよなーアハハハ！」

カウンター中央にどっしり構える年期の入った焼き台。この焼き場に立てる人間はただひとり店長だけである。（従業員は3人だけど）

今日も伝統の焼き台の前には、いつものように毒舌を振りまいて絶好調の花形焼き師、修店長がいた。

「あのー就職決まったそうですね。おめでとう！」

たまたま隣に居合わせた女子大生3人組のグループが嬉しそうに声を掛けてきた。イェーイ！俺たちは即興で乾杯を交わした。

俺が石井から連絡を貰ったのはつい昨夜のことだった。

「社長がきみの写真をたいそう気に入ったみたいだ。うちの新人タレントたちと共に、若い才能を伸ばしていって欲しいと伝えるように言われたよ。さっそくだけど、来週の頭から事務所の前準備を手伝って欲しい。スケジュールを空けてくれるかな？」

石井から太鼓判を押されていたとはいえ、俺にとっては超難関な面接試験に合格したようなもの。携帯電話を耳に当てたまま、心の中で喜びを爆発させながら何度もガッツポーズを連発したっけ。

ちょうど今日はイタリアーノの定休日だった。ささやかな自慢と義理で報告をするべくやって来た俺を、修が手荒く祝福していたというわけだ。

「しかし、この就職難の時代に駆け出しのお前を雇ってくれるお人よしな芸能事務所があるとはなあ。ジュン、おまえはマジで超ラッキーな男だぜ」

相変わらず口は悪いが、きょうの話題は俺の就職話で持ちきりだ。やっぱり持つべきものは友か。まるで自分の事のように喜ぶ修が、俺には嬉しかった。まずい！焼き台の煙が目に入ってしまったらしい。

「よーし！みんな。きょうは特別だ。おれのダチの就職を祝って、全品1割引にするぜ！ただし、みんな！おやじには内緒だぜ」

大笑いする修。（おやじとは隠居したオーナーのことだよ）

あおりまくる修とますます上がる店内のテンション。みんなの一体感も最高潮に達している。

「へい、いらっしゃい！おーい、みんな！ご新規おふたりさんが来たんだ。もっと詰めてくれよ。ノリ！奥から椅子を出してこい」

「お、修ちゃん。これ以上はもう無理だって。ちょう限界ー！！」

ようやく引けたかと思えばすぐに満席になる。まるで申し合わせたかのように、入れ替わり立ち替わりトン太へ押し寄せる女の子たち。幾度も繰り返される喝采と乾杯の嵐。俺の即興就職祝賀パーティはいつ終わるともなく、朝までつづくように思えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1634o/

ハイウェイスター

2010年10月31日23時10分発行